ZINE・15 ― 2018・春

「米騒動」100 年
プレ企画：〈68 年〉から 50 年

――「米騒動」から 100 年は
〈68 年〉から 50 年でもある…――

生・労働・運動ネット　富山

はじめに

2018 年 1 月 13 日、「米騒動 100 年」プレ企画「〈68〉年から 50 年」Part1、Part2 を行った。

Part　1「〈68〉年―語る・語らない・語りえないのあいだ」
　　ゲストスピーカー　小杉亮子さん
　　（京都大学　アジア研究教育ユニット研究員）
Part　2　「『〈68〉年から 50 年の〈後〉に』―故旧忘れ得べき」物語
　　スピーカー　埴野謙二　（生・労働・運動ネット富山）

ZINE･15 を作成するにあたり、小杉亮子さんには、レジュメを改定し、「プレ企画に参加して」をつけ加えていただきました。心から感謝します。

加えて、代表の埴野謙二の昨年末･年始にかけての所感を付加し、「ZINE･15」を発行した。

Part2 の資料は別冊とした。

目次

「米騒動」100 年プレ企画　「〈68〉年から 50 年」　・・・・・・・・・　1
Part　1「〈68〉年―語る・語らない・語りえないのあいだ」・・・・　5
　　レジュメ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　　プレ企画に参加して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Part　2　「『〈68〉年から 50 年の〈後〉に』―故旧忘れ得べき」物語
　　スクリプト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
過去は死なない、過ぎ去ってもいない
　　――2017 年冬～ 2018 年春――　・・・・・・・・・・・・・・・29

米騒動100年 プレ企画「〈68〉年から50年」

〈68〉年に慎重に近づこうとする若い研究者と〈68〉年の事後の生をどこまでも生き続ける者と〈68〉年のエコーを生きようとする者と…ごった煮で過ごした希有な時間

Part 1 「〈68〉年一語る・語らない・語りえないのあいだ」

列車が来ない

1 月 13 日、当日は前夜からの大雪で風景が一変するほどの積雪。大阪から JR で富山駅に到着するはずの小杉亮子さんの身を案ずる。悪い予感は的中。福井辺りで列車が立ち往生し、2 時間の遅れ。予定では一緒に昼食でもとりながら打ち合わせをと思っていたのだが、改札で小杉さんを迎えたときには、もう Part1 予定開始時刻を過ぎていた。

長時間列車の中でかんづめ状態だった小杉さんには大変申し訳なかったが、挨拶もそこそこに、立ち止まることなく会場へお連れする。会場到着後は、簡単な挨拶と紹介を経て、すぐに話を始めてもらう。結局、スケジュールを詰めて、40 分遅れで小杉さんに話し始めてもらう。小杉さんには、大変なハードワークを強いてしまうことになった。

〈68〉年を対象とすることの難しさ

『無数の問いの噴出の時代』とは、小杉さんも企画に関わった国立歴史民俗博物館の〈68〉年の特別展における、主催者側の〈68〉年「評」である。しかし、この〈68〉年は、観察や評論や研究の対象にすることを、易々とは受け入れない。〈68〉年から噴出される無数の「問い」は、乱反射し、アプローチを試みる者すべてに突き刺さる。つまり、『無数の問いの噴出』は『～の時代』と括られることを、すぐさま問い返してしまうのだ。主催者はなぜ〈68〉年をショーケースに入れて括ることができるのか。また、括られた物を観に来た者たちを、問い返してしまう。なぜあなたは、〈68〉年は括られるものだという前提で、大人しく観客として振る舞っているのか。

小杉さんの真摯で謙虚な姿勢

そんな〈68〉年の大学闘争とは何であったのかについて、研究者として社会学的に「問い」を立てているのが、小杉さんである。それも東大の大学闘争を担った当事

者たちへのインタビューを通してアプローチしているということである。ダイジョウブカ？

インタビューされる側は、「今のあなたの生き方は、あの頃あなたが発していた『問い』を貫いているのか」、つまり「あなたはその後をどう生きたのか」を、インタビューを受けることで、常にセットで問われてしまう。「あの頃はこうだった」と過去のこととして語るなら、その頃と現在の在り方との整合性、不整合ならばそれをどう処理しているのかが、即座に問われることになる。

そして、その時同時に、当時のことを語らせようとする側のスタンスも問われるはずである。大学闘争について研究者として社会学的な「問い」を立てているあなたは、「大学解体」や「自己否定」についてはどのようなスタンスを取っているのか。

つまり〈68〉年のアフターライブズを自分はどう生きているのかを語ることを抜きにして、〈68〉年は語りえない。そして、自分は〈68〉年のアフターライブズをどう生きているのかをさらけ出すことを抜きにして、相手には問えない。若い研究者は、この難題にどう立ち向かっているのか。

これは、オフレコなのかもしれないが、小杉さんが〈68〉年に興味を持ったきっかけは、小杉さんの父親が全共闘に特別な憎しみを抱いていることを知ったことだという。厳格な親の家庭に育った小杉さんは、時に親の教育方針について反発や疑問を感じ、父親が特別な感情を抱く全共闘運動を担ったのは、どんな人たちだったのだろうと思いを馳せることになる。これが、全共闘運動を研究対象にする原点になったのだそうだ。この「民青」的スタンスに違和感を感じ、懐疑的になりながらも、そのスタンスを踏まえつつ、慎重な足取りで全共闘運動にそろりそろりとアプローチする小杉さんの迫り方が、先の難題にまともにぶつからずに〈68〉年に近付ける小杉さんなりの術なのだろう。そのことを、さらけ出して話してくれる小杉さんのけれんみのない話しぶり。そこに、インタビュアーとしての小杉さんの佇まいを感じた。

そのような小杉さんだからこそ、東大闘争を担った者たちへのインタビューから、「語る、語らない、語りえないのあいだ」があるということに着目することができた。そして、60 年代を通じて、既存の「戦略的政治」とせめぎ合いながら、自らの生き方の問い直し、あるいは自分・たちの関係性の問い直しから始めようとする「予示的政治」が生まれてきたという捉え方ができたのではないか。

研究の方向性を太い一筆書きでぎゅっと表現してくれた小杉さんの研究者としての真摯で謙虚な姿勢には、好感が持てた。

ユニークなアプローチが開く可能性

「決意主義」「決戦主義」ではなく、また、その後にやってくる「消費主義」のように資本の側に回収されることのない「行動的快楽主義」（＝「自分が走ることで世界が変わる」といった実感や、窒息させられそうな閉鎖的な壁に身体ごとぶつかることで突破することができるといった快感）とでもいうようなものもまた、全共闘運動の推進力の大きな要素だったのではないかと思う。「予示的政治」とともに、この「行動的快楽主義」の要素を現在の運動の中にどう取り戻すかということが、これからの運動の大きな課題になると思う。東大闘争にも勿論あるが、この「行動的快楽主義」は、日大や、それらの後に続いた全国の大学闘争の中に色濃くある。インタビューというアプローチの仕方は、このことに迫れる可能性を、大いに持っていると思う。小杉さんの今後の仕事に大いに期待したい。

Part 2 「『〈68〉年から50年の〈後〉に』一故旧忘れ得べき」物語

〈68〉年のアフター・ライブズを生きるものの矜持

会場を「生・労働・運動ネット」の事務所に移して行った Part2。そこでは、わたし・たちのメンバーである埴野謙二さんの〈68〉年のアフター・ライブズを生き続ける矜持に触れた。濃密な時間だった。埴野さんは、1968 年にはすでに大学の教官であり、学生として運動を担ったわけではない。そしてもちろんどこかの政治党派に属していたわけでもない。しかし、50 年代終わりから 70 年代前半までの広い意味での〈68〉年の「問い」を、生の中心に据えて激しく生きてきた人である。

〈68〉年を直接体験していないわたし・たちの元へ、埴野謙二さんを通して〈68〉年はエコーしてきた。〈68〉年のエコーに触れ、エコーを生きようとしたわたし・たちにとって、〈68〉年は常に自分を問い返すベクトルであり、その時々の自分が何かをやろうと踏み出す時の〈参照点〉となっている。

この日の趣向は、かなり凝っていた。〈68〉年を背景にしたり、小道具にしたり、物語の通奏低音にしたりした小説や歌の断片がコラージュされた、本人曰く「電動紙芝居」のような音楽と映像が流れ、DJ 埴野の解説が入る。しかもボリュームたっぷりに、である。

そして、最後には、自身が身を乗り出し、直接呼びかける。呼びかける相手は「かつて 60 年の、〈68〉年の戦場を、熱い身体で駆け抜けようとした諸君」である。「〈仮装〉『高齢者生存組合全国評議会』からの〈招待状〉」では、「「3・11 ／ 12」後の反原

発運動や 2015 年の「安保法制反対運動」の行動は、「〈68〉年からの〈後〉」の時の中で、諸君が身を立て、名を上げることで果たしてきた列島社会を分断する罪多い営みに対する、どのような真摯な反省の上に成り立っていたのか？」というように〈68〉年的「問い」で、正面から突き刺す。そして、「〈仮装〉『高齢者生存組合全国評議会宣言』」では、さらに煽る。「戦友諸君、老いたる兄弟姉妹諸君！これまでに獲得してきたすべてを〈武器〉にかえ、我が身を包摂する生の捕獲システムと闘え！・・・高齢者生存組合全国評議会とともに一斉蜂起せよ！」・・・

〈68〉年を抱いてできるだけ遠くまで行けた人は誰なのか？―埴野さんはそんなことを考えるという。

〈68〉年のエコーとしての集団

埴野さんは、小杉さんの言い方を借りれば、「戦略的政治」を追及する政治党派の成り立ち方に強い違和感を持ち、「予示的政治」を今ここに実現しつつ水平的に結び合う集団を作ろうとした。そして、埴野さんを通して〈68〉年のエコーに触れ、自分もまたエコーを生きようとしたわたし・たちが、それに呼応した。

しかし、〈68〉年から 50 年、〈68〉年のエコーを生きていると後生大事に言っていても、その意味はどんどん薄れてくる。現在、どういう「問い」として〈68〉年の「問い」をもちかえているのか、が激しく問われる。

米騒動からの 50 年後のエコーとしての〈68〉年、さらにそこから 50 年後の現在。感受してきた通奏低音のエコーを、どう具現させるのか。―「生・労働・運動ネット」は、米騒動 100 年の連続企画を通してその先に〈生存組合〉を目指す。

2018年1月13日（土）

生・労働・運動ネット富山　〈68〉年から50年　　於・サンフォルテ306号室

小杉　亮子

Part1 「〈68〉年―語る・語らない・語りえないのあいだ」

――東大闘争参加者への聞き取り調査から見えてくるもの――

0. はじめに

今回、生・労働・運動ネット富山から声をかけていただいたきっかけは、インターネット上の雑誌『現代の理論』に執筆した、山本義隆著『私の 1960 年代』（2015 年、金曜日）の書評だった。とりわけ、タイトルの「語る、語らない、語りえないのあいだ」という言葉に関心を持ってくださったようだった。

そこで、当日は、このタイトルをつけるにいたった理由やそこに込めた意味から出発し、わたしの研究の内容をお話しすることにした。わたしの初発の関心は、1960 年代学生運動参加者はどのようなひとたちだったのか、どのような運動主体だったのか、という素朴なものだった。1960 年代の社会運動にかんする書籍はたくさんあるが、学生運動については同時代を経験していないひとびとにはわかりづらい、想像しづらい部分が多いと感じてもいた。このわかりづらさはおそらく、一部には、戦後日本の社会運動史を語るうえでの「史観」（道場 2015）の問題に由来している。史観の問題とは、特定の運動を中心に戦後日本社会運動史を語ろうとすることによって、研究者や当事者の暗黙の価値づけによる特定のアクターや運動の排除が起きるという、運動史の視点の問題である。

史観の問題を乗り越え、いま望ましいと語られる傾向にある運動主体・政治的主体とは異なる主体のありかたを、1960 年代学生運動から探ることができるのではないか。現代の社会運動に潜在する運動主体、希望や欲求にかたちを与えるきっかけになるのではないか。こうした問題意識から、わたしはこれまで、東大闘争（1968 ～ 1969 年）の参加者・関係者にたいする聞き取り調査を行ってきた。

1.「語る、語らない、語りえないのあいだ――山本義隆『私の1960年代』を読み解く」（『現代の理論』第8号掲載）の背景

■　東大闘争参加者・関係者の「生活史」聞き取り調査（インタビュー）

- これまで、東大闘争参加者・関係者の幼少期から現在までの人生を、テーマ（1960 年代学生運動）に焦点を定めつつ、聞き取ってきた。具体的には、子どものころに好きだったこと、将来の夢、中高生時代に夢中だったこと、印象深いできごと、社会・政治への関心の芽生え、大学入学後の経験（部活、サークル）、東大闘争、闘争後の大学生活、大学卒業後の歩みなどについて尋ねてきた。
- これまでに、東大闘争参加者・関係者 45 名にたいし、2013 年 6 月～ 2014 年 9 月に聞き取りを実施した。
- 福岡安則（埼玉大学名誉教授、1966 年東大入学、東大闘争の当事者）との共同調査だった。

■東大闘争についていっしょに聞き取り調査をした福岡安則の研究

- ライフストーリー法で被差別部落のひとびとや在日コリアン、ハンセン病者への聞き取りをおこなってきた。代表的著作に『在日韓国・朝鮮人 —— 若い世代のアイデンティティ』（1993 年、中央公論社）がある。
- 福岡のお弟子さんである黒坂愛衣の著作には、『ハンセン病家族たちの物語』（2015 年、世織書房）がある。黒坂は自らが聞き取ってまとめた内容を、ライフストーリーを越えて「人生物語」と表現している。語り手が自分の人生を思い返し、語った物語という意味か。

■ 「語る、語らない、語りえないのあいだ」というタイトルの背景には、生活史という手法をめぐる社会学の議論がある

- 生活史とは、聞き取り（インタビュー）・文書資料分析・対象者に手記を書いてもらうといった方法によって得られる、調査対象者の life 人生／生活が記述されたものである。
- 聞き取り調査で得られた生活史については、おもに社会学において、「口述性（オーラリティ）をどのように考えるか」という点が長年議論されてきた。その結果、オーラルヒストリー（oral history）とライフストーリー（life story）という 2 つの方向性が探られてきた（有末 2012: 48）。
- インタビューの現場で語られるストーリーは生きられたヒストリー（事実）をなんらかのかたちで反映していると見なす立場がオーラルヒストリー派である。それにたいして、インタビューの場で語られるストーリーは研究者と語り手の相互行為をとおして構築されたものであり、唯一リアルなものは語りというテクストのみであると考える立場がライフストーリー派である。共同調査をしてきた福岡安則はライフストーリー派に属しているといえる。
- わたしの立場は、端的に言えばオーラルヒストリー派である。それは、限られたデータで複雑な社会的現実に接近していくことしか、社会学者にはできないのではないかと考えているためだが、上記のような議論があるために、聞き取りの場で「なにが語られるのか」（＝「なにが語られないのか」）については敏感にならざるをえない。

■ **社会学者・鶴見太郎の発言を知って**[*1]

- 鶴見は、ロシア語圏のシオニズムに関する歴史社会学的研究をしてきた。著作に、『ロシア・シオニズムの想像力 —— ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（2012 年、東京大学出版会）がある。
- 鶴見によれば、多様な当事者の語りを集めることによって研究対象を体系的に理解できる可能性はある。その一方で、「当事者たちが語りたがらない、語りにくい、あるいは忘却してしまったこと、ここのなかにも、当事者を理解する重要なヒントが隠されている場合もあるのではないか」。「多様な当事者が一様に語りたがらないこと」にも、当事者をさらに理解していくヒントがあるはず。
- 鶴見の念頭には、1917 年ロシア帝国崩壊時のユダヤ人たちが置かれた状況があった。当時、ヨーロッパで最大のユダヤ人口を抱えていたのがロシア帝国だったという。ユダヤ人はマイノリティだからこそ、とれる選択肢が限られており（赤軍か白軍か）、最終的には大半が赤軍につくものの、ユダヤ人にたいする迫害（ポグロム）をしていた白軍の側についたユダヤ人もいた。マイノリティであるゆえの袋小路というユダヤ史の特徴がここにあらわれてくるのであり、このことが語られないとしたら、それはユダヤ人にとっての黒歴史ではなく、ロシアにとっての黒歴史のはずである。
- ここには、事件直後は当事者がそのことについて語りたくないがために語られず、そのため後続世代が事件について知る機会が消失し、結果として忘却が起こって、事件について語られなくなるという構造がある。

■ **では、東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか①―女性参加者の経験**

- 1968 年当時の東大における女子学生の割合は 3.7%だった。
- 男子学生が圧倒的に多数派を占めるキャンパスで形成された学生運動では、男子学生を標準的参加者として想定して、戦術・戦略、個々の参加者たちのふるまいさえも形成されていたと想像できる。
- たとえば、東大闘争の後半では警官隊をはじめとする敵手との暴力的衝突、いわゆるゲバルトが日常的に発生していた。体力面では男子学生にたいして不利であることが相対的に多い女子学生、さらに肉体的衝突に抵抗感を感じる男子学生が東大闘争に参加したいと考えたときに違和感や挫折感が生じやすかったのではないか。それだけでなく、物理的衝突に十全に参加しうる意志がある男子学生と、そうではない女子学生と一部の男子学生とのあいだに亀裂が入りやすい状況であったと思われる。ここから、1960 年代学生運動における直接行動

*1 鶴見太郎氏の発言は、2016 年 2 月 27 日第 3 回埼玉大学人文社会科学研究科連続シンポジウム「混成する文化 — 歴史と物語の交点」においてのものである。福岡安則から提供された福岡のフィールドノート「自分語りのフィールドノート②（2016.2.26 ～ 3.1）　前回は『不安定狭心症』、今回は『冠攣縮性狭心症』」に、同シンポジウムの音声起こしが収録されていたことによって、鶴見氏の発言を知ることができた。

で、いかに「ゲバルト」が重視されていたかがわかる。

- そこから語られることが少ない視点こそが、逆に運動の特徴を物語っているケースといえる。
- 一方で、男子学生たちは学園闘争を肯定的かつ祝祭的に回顧し、他方で、女子学生たちは学園闘争での違和感や挫折がフェミニズムへと連続した過程として学園闘争を描くという、ジェンダーで分かれた回顧が日本では続いている（Schieder 2018）。

■ 東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか②―語りづらさを抱えた当事者の経験

- 加齢や病気、個人的な好みといった理由ではなく、1960 年代学生運動と関連する理由から語りたくない人が存在することを、聞き取り調査をしていくなかで認識するようになった。当事者から、東大闘争については「一生言わないほうがふつうの感覚」と言われたこともある[*1]。
- 新左翼党派関係者の語りづらさは、ひとつの理由として、現在所属している場合はもちろん、すでに脱退している場合も、活動にかんする証言を行うことで直接的に本人や仲間が不利益を被る可能性から生じていると考えられる。党派を脱退するさいに外部に情報を漏らさないことを約束することもあるという。
- それ以外に語りづらさを抱えている当事者がいる理由を、ある聞き取り対象者は次のように推測してくれた。第一に、東大闘争は長期にわたって大学執行部と対峙し、学内の建物を占拠しストライキを続けるという非日常的な環境だったので、その後の生活や現在との断絶が大きいのではないか（3.で触れる東大闘争における予示的政治と関連している論点である）。第二に、東大闘争終結直後は東大闘争について語るとなにかしら不利な事態に陥る可能性を感じさせる情勢が続いたため[*2]、関係していた人びとが沈黙するようになってしまったことも関係しているのではないか[*3]。これは、鶴見太郎が指摘した、忘却によって語られなくなる構造である。

■ 東大闘争について語られないこと、語りえないことには、なにがあるか③―暴力をふるった経験、ふるわれた経験

- 聞き取り調査のなかで、ゲバ棒やヘルメットによる防衛や示威行為をした経験、すなわち当時の言葉で言えば「象徴的暴力」を行使した経験は、躊躇なく語られる傾向にある。
- また、自分が敵手に振るった暴力について語れる語り手、自分が受けたリンチについて語れる語り手もいる。こうした語り手たちは、当時のことについて相当、対象化もしくは理論化できているのではないだろうか。すなわち、特異なリーダー的存在の学生には、このような

---

*1 2013 年 10 月 18 日のフィールドノートより。
*2 この点については、1960 年代学生運動を受けて警察庁が 1960 年代後半から 1970 年代にかけてポリシング戦略を巧妙化させ、「自分勝手で残虐な『過激派』」（安藤 2013: 134）という社会運動家イメージをメディア上につくり上げることに成功したという安藤丈将（2013）の指摘が重要である。
*3 2014 年 1 月 31 日のフィールドノートより。

暴力についての語りが可能なのではないだろうか。たとえば、東大闘争後半期には学生間の対立が暴力によって昂進したが、この時期についてみんなが「頭おかしくなって」いたと表現する民青系学生や、東大闘争後半期の「捕虜交換」について証言した全共闘派学生がいた。

- □ しかし、自分がふるった暴力、ふるわれた暴力、ふるえなかった暴力によって心身が傷ついた学生のなかには、語りにくさを抱えたままのひとも多いだろう。
- □ さらに、東大生ではないが東大闘争に参加して暴力をうけた、暴力をふるった学生も少なくない数でいたと思われる。こうした学生の存在については、東大闘争研究という枠組みでは想起されにくいことによって、語られなくなるという問題がある。

2. 東大闘争の概略

■ それでは、東大闘争について語られることからは、なにが見えてくるのだろうか。3.で、東大闘争参加者・関係者への聞き取り調査から見えてきたことを議論する前提として、ここでは簡単に、東大闘争のプロセスを紹介しておきたい。

■ 発端は、1964 年から全国の医学部学生たちが続けていた、インターン制度廃止闘争だった（1967 年からは登録医制度廃止闘争）。

■ 1968 年 1 月 29 日、東大医学部は全四学年がストライキに突入。ストライキのなかで、退学処分 4 名を含む合計 17 名という類例のない学生大量処分が医学部教授会によっておこなわれた。しかも処分された学生のうち 1 名は処分理由となった事件に関わっていなかったことが明らかになり、医学部生と医学部当局の対立が決定的になった。

■ 1968 年 6 月 15 日、医学部生たちが本郷キャンパスにある安田講堂を占拠した。これにたいし、東大当局は 6 月 16 日に機動隊を導入した。当時の学生たちや教員の感覚からすれば大学自治を侵す暴挙であり、これによって他学部に抗議活動が広がり、闘争の全学化した。

■ 6 月 26 日の文学部を皮切りに、医学部学生の不当処分や機動隊導入に抗議して、各学部の学生たちが続々と無期限ストライキに入った。

■ 7 月 5 日、学部ごとのストライキ実行委員会や新左翼諸党派が糾合して「東京大学全学共闘会議」（以下、東大全共闘）が結成された。

■ 10 月 2 日、法学部の学生たちがストライキを決議したことで、全学部が無期限ストライキに入る。教育学部は民青主導、ほか 9 学部は全共闘系主導だった。

■ 東大闘争が長期にわたって続くなかで、全共闘系学生たちのなかから、登録医制度や不当処分といった個別の問題を越え、東京大学や研究者のあり方、さらにはそこで学ぶ自らのあり方を問う動きが出てきた（全共闘のスローガン「大学解体」「自己否定」）

■ 1968 年 11 月、日本共産党の方針転換によって、民青系の学生たちがストライキ推進からストライキ終結へと態度を変更した。民青と一般学生によって形成されたストライキ収束勢力と大学当局

とが交渉を進めていくことになった。

■　1969 年年 1 月 10 日、7 学部の学生代表団と大学当局とのあいだで「10 項目の確認書」が締結される。これと前後して各学部でストライキが解除されていく。

■　1969 年 1 月 18・19 日、確認書締結後も全共闘系学生の一部は安田講堂占拠を続けていた。2 日間にわたって機動隊と大規模な衝突を繰り広げ、最終的には排除された（安田講堂攻防戦）。

■　ただし、すぐにキャンパスが平常に戻ったわけではない。全共闘系学生たちは確認書による闘争の終結に納得せず、再度の機動隊導入の責任を大学当局にたいし追及しようと試みたし、授業再開阻止に動いた。ストライキが最も長く続いた文学部では、スト解除は 1969 年 12 月だった。

3. 東大闘争について語られること――東大闘争における予示的政治の探究

■　東大闘争は、民青、新左翼、ノンセクトという異なる性格をもった三層の参加者たちが、それまでの左翼学生運動を前提にそれぞれの学生運動を形成した点において、広くは日米安保体制や冷戦構造、ベトナム戦争、局所的には東大内における不正義を前におこなった運動文化の実験と創造の場・時期だった

- 高畠通敏（1977）はその「革新国民運動」論で、戦後大衆運動の主要な担い手であった戦後革新国民運動の特徴を詳しく分析している。革新国民運動は、表面上のリーダーシップをとるいわゆる進歩的文化人、実際の運動の中核を担う総評系の労働運動、政治的中枢を担う社会党から構成されており、1956 年以降はそこに共産党も加わった。60 年安保闘争において、革新国民運動が持っていた、戦略面・思想面の限界が露呈すると同時に、この運動を批判し、新しい運動を形成しようとする人びとも見られた。それが、のちにベ平連につながっていく声なき声の会と、新左翼党派のひとつ共産主義者同盟（ブント）だった。
- 東大でも 1960 年代をとおして、革新国民運動の一翼を担っていた左翼学生運動への批判とオルタナティブの模索がみられた。具体的には、60 年安保闘争時には「ノンポリ」と呼ばれた学生たちが、東大闘争には「ノンセクト」として参加し、東大闘争の過程のなかで「ノンセクト・ラディカル」と自称・他称するようになっていった。
- 全共闘運動には、ふたつの側面があった。第一に、学部生や大学院生、おもだった学生組織、また新左翼党派が参加し、諸代表が協議して東大闘争の方針を決定する、共闘のための“組織”だった。同時に、第二に、とりわけノンセクト系の学生たちにとって、新旧左翼政党によって集会やデモに動員されるそれまでの左翼学生運動とは異なる学生運動として、どのような組織構造や意思決定方法にもとづくものがありえるか、それはいかに形成しうるかという問題意識を反映した、新しい学生運動のありかたを象徴する表現だった。

■　では、東大闘争で模索された新しい学生運動の行動原理・組織原理とは、どのようなものだったのか。東大闘争の感想や個人的な総括、参加をとおして得た価値観、参加にあたっての方針にかん

する参加者たちの語りには、参加者間で考えや意見が大きく割れる、ふたつの争点があった。後述するように、このふたつの争点は、予示的政治と戦略的政治の対立として整理できる。このうちの予示的政治こそ、東大闘争で模索された社会運動のオルタナティブな方向性だった

■ **第一の争点は、社会変革について考えるさいに対象とする範囲をめぐる対立だった**

- 変革の範囲を、最大にとれば社会体制を変革する革命（revolution）となり、最小にとれば自己を変える自己変革（self transformation）や自己解放（self liberation）となる。
- とりわけ、社会主義・共産主義革命をめぐる評価において、この対立が明確に見られた。
- 全共闘派の学生たちは東大闘争の展開過程から収束過程にかけて、政府・自民党による日大闘争への介入や、入試実施を手段にした東大執行部への圧力、武力の点において圧倒的に優位に立つ機動隊によるキャンパスからの排除を経験した。また 1969 年には、大学にたいする政府権限を強化しようとする政府・自民党によって、「大学の運営に関する臨時措置法」（大学措置法）が衆参両院での強行採決をへて制定された。全共闘派の学生たちは、大学執行部と教員たちの硬直的対応によって学内の変革を実現することの難しさに直面しただけではなく、国家権力による運動にたいする抑圧にも直面することになり、マクロ権力を敵手とする運動とは異なる方向性を探らざるをえなかった。これによって、変革の範囲を相対的に小さく、すなわち国家権力ではなく社会内権力の問い直しへと向かうようになった。

■ **第二の争点は、社会変革のために遂行する行為の基準をめぐる対立だった**

- 運動のなかでの行為を目的実現にむけた手段的（instrumental）なものと見なすか、もしくは、行為自体が社会変革を構成する自己充足的（consummatory）なものと見なすか。
- 漸進的な改革や、ある程度での妥結を賢明な判断として評価する語りが、民青系や新左翼党派のシンパ・同盟員だった学生から聞かれた。活動家としては、全共闘派が“敗北”する可能性が濃厚になった段階でなんらかの妥協が必要だと判断せざるをえなかったのではないか、というように。
- 民青系学生からは、なんらかの妥結のためには考えが異なる人びとも手を結ぶこともありえるという語りも聞かれた。社会変革のためには戦略的に漸進的手段をとることが現実的だと見なす態度であり、たとえば、1968 年 11 月以降それまで対立していたストライキ反対派の学生たちと、一転して民青として手を結んだことについて、こうした語りが現れる。
- これにたいして、ノンセクト・ラディカルは、社会主義革命への道程として、もしくは政治闘争の一部として、新旧左翼政党・党派が手段的に学園闘争を位置づけていることに反発していた。ノンセクト・ラディカルの学生が、東大闘争のさなかにおける自分たちの学科での営みを「理想の社会」ととらえる態度に、闘争のなかでの行為を自己充足的なものとして見なす姿勢を見て取れる。

■ **東大闘争に見られた、予示的政治と戦略的政治の対立とはなにか**

- 予示的政治（prefigurative politics）では、社会運動の過程そのもののなかで、運動が望ましいと考える社会のありかたを予め示すするような関係性や実践、政治の形態をつくりだし、維持することがめざされる（Graeber 2004=2006; Holloway 2002=2009; 稲葉 2010）。予示的政治が批判してきたのは、「各々の社会運動はそれぞれが掲げる理想の社会を構成する論理＝ロゴスに到達するための手段」（稲葉 2010: 14）だと考えるかぎり、「今ここで運動にかかわっている人の『生』のあり方そのものはカッコに入れられてしまう」（稲葉 2010: 14）ことだった。1990 年代以降の反グローバル化運動の理論的根拠とされ、注目を集めてきたが、アメリカの “1968”に予示的政治を見出す議論がすでに 1980 年代に提出されている（Breines 1982）。
- 戦略的政治（strategic politics）は、マクロな権力に挑戦し、政治や経済、社会制度を大きく変革させるために、戦略的手段としての行為を遂行し、段階的に変革がめざされる。具体的な例としては、社会主義運動やマルクス主義運動が挙げられる。
- 1960 年代の学生たちによる運動文化の実験と創造において、民青や一部の新左翼による学生運動は戦略的政治志向の社会運動を形成し、保持しようとしていたのにたいし、これに対抗してノンセクト・ラディカルや一部の新左翼の学生たちが志向し形成を試みた新しい運動のありかたが予示的政治だった。

■ **東大闘争では、非日常性のなかでこそ、予示的政治がかたちづくられた**

- 予示的政治において、自らが他者との関係性のなかで意図せずに行使している権力や関わっている不正義や抑圧をただそうとするとき、それは自己変革や自己解放の側面を持つ。
- とくに東大闘争参加者からは、予示的政治のなかでも自己変革を強調する語りが多く聞かれた。
- 東大闘争における全共闘、とくにノンセクトにとってのイシューのひとつは既存の大学・教員層に存在していた権威主義を批判しつつ、社会のなかでの大学や学生の責任を問うというものだった。そしてこの問題意識の論理構造は、ベトナム戦争に加担している日本政府を批判し、そのもとで安住する日本人の責任を問うというベトナム反戦運動の論理構造と相似だった[*1]。ベトナム反戦運動の高まりのなかで東大闘争が高揚したのは、双方の運動参加者の

*1 鶴見俊輔によれば、ベ平連代表だった小田実が戦争にかんする加害者と被害者という考え方をベトナム反戦運動のなかで唱え、1965 年以降に大きな影響力を持った。すなわち、1965 年ごろまで日本の人びとは、戦争というと十五年戦争において戦争を指導した日本政府の指導者を加害者、それ以外の日本国民を被害者として見なす傾向にあった。しかし、1965 年のアメリカによるベトナム北爆開始のころから、アメリカによるベトナム侵攻と十五年戦争中の日本によるアジア侵攻とのあいだに存在する、行為の類似性がひろく日本人によって認識されるようになった。このとき小田実が唱えた加害者と被害者というスローガンは、「確実に民衆の想像力に火をつけた」（鶴見 2005: 106）。

1960 年代後半のベトナム反戦運動では、在日米軍基地をベトナム戦争に利用することを妨げたり、ベトナム戦争に使われる兵器産業が日本で発展することを妨げたりしようとする行動がみられた。「これは日本人が、ベトナム人への加害者としてみずからをみるようになったことのあらわれ」（鶴見 2005: 106）だった。

あいだで問題把握のしかたが類似しており、とりわけ前者が後者に影響を与えたからだと思われる。結果として、東大生として、将来には他者との関係性のなかで有利な立場に立ったり、また研究活動や職業をつうじてさまざまな影響力を行使したりしうる自らのありかたをいかに問い直すか、ということが重要となった。

- また、東大闘争にはそれまで社会運動とは関わりがなかった学生たちが多く参入した。これによって、東大闘争は大きく高揚し、長期間にわたって維持されたバリケード封鎖とストライキという、非日常的な時空間が形成された。同時に、こうした学生たちにとっての社会運動の原体験が、さまざまな議論の場での認識の深化や自らの立場性の問い直しといった、日常を相対化したうえでの政治的自己形成が強調されるものとなった。

■ ある全共闘派の学科の学生たちが唱えていたスローガンに、「日常性の堰止め」というものがある

- 社会運動や抗議活動が加熱した結果、ときに、誰のコントロールからも離れてしまい、日常を成り立たせている約束事が一旦保留になり、ある種の祝祭空間になったり、もしくは秩序が失われて暴力が剥き出しになったりすることがあるのではないか。このとき、日常の規律がいったん保留になるからこそ、そこにできた空隙に、既存の権力や文化に対抗するような、あたらしいありかたも生まれえる
- 東大闘争では、まさにストライキや建物占拠（バリケード封鎖）によって日常性がいったん堰き止められていた。そのうえで、上記のような日常的な秩序の宙づり状態が訪れた。ここから日常に回帰したときに、日常を枠組みづける語彙・認識では、この非日常性のなかでの経験をとらえ、説明しきれない。
- 冒頭の東大闘争をめぐる語られないこと、語りづらいことという問いに戻れば、予示的政治を生み出した東大闘争の非日常性もまた、東大闘争の語りにくさの理由のひとつなのではないか。

■ さらに、東大闘争で萌芽的に追求された予示的政治とは、自らのありかたの問い直しを強調するものだった。そうした予示的政治は、ともにこの困難な課題に取り組む仲間のネットワークを維持する、小集団を形成する、研究者の道を選ぶといったなにかしら工夫なしには、継続が困難だろう。これも東大闘争をめぐる語りにくさの理由のひとつなのではないか。

4. むすびにかえて

■〈68〉年から50年は到来するか

今回、東大闘争調査から見えてきた「語る、語らない、語りえない」というテーマのほかに、「〈68年〉から 50 年は到来するか」という問いも生・労働・運動ネット富山から投げかけられていた。到来の意味は複数あるだろうが、最後にこの問いについて考えてみたい。

まず、当事者による“1968”にかんする回顧・発言は、2000 年代後半から明らかに増えている。それはおそらく、当事者が退職の時期を迎えて政治的発言を自己規制しなくなった、他界する当事者も増えてきたなかで資料を保存し証言を残そうという機運が高まってきたといった理由による。この意味においては、50 年は到来しているが、おそらく問いかけられた到来はこうした意味においてのものではないだろう。

では、ほかの意味においての到来ではどうだろうか。この点について考えるさいに、最初に触れておかなければならないのは、東大闘争について「語られなかったこと、語りえないこと」、すなわちこの運動が持っていた男性性や暴力の問題を考えると、同様の運動が再び発生するという意味での到来を単純に期待することは、わたしはしたくないということである。

そのうえで、まず、若者運動の高揚という意味での到来はどうだろうか。東大闘争参加者・関係者の聞き取り調査から見えてきたのは、かれらの幼少期から思春期にかけてのる政治的学習の濃密さだった。その語りからは、敗戦直後の学校における自由主義的雰囲気、戦争・軍事基地や貧困といった社会問題との距離の近さ、小中高での教師の活発な政治活動・政治的発言などが浮かび上がってきた。現代の若者はこのような長期間にわたる政治的学習の経験を経てきていないために、若者運動の高揚という意味での到来はすぐには訪れないだろう。ただし、いまの若者が社会に関心がないわけではない。わたしとしては、若い世代が直面する社会問題（貧困、ブラックバイト、奨学金、非正規雇用など）に向き合い、それとの応答のなかで芽吹いている予示的政治に目を向けたいと考えている。

次に、非日常性の高まり、日常性の堰止めとしての〈68〉年の到来はどうだろうか。この点については、わたしたちの社会では社会運動が長らく「鎮圧」（大野 2014）されてきたことを想起しなければならない。国家（警察、公安、機動隊など）やマスメディアが人びとの主体性、闘争の場や言葉を管理し、抑圧してきたために、人びとの社会運動にかんする想像力は刈り取られ、貧困になっている（大野 2014: 23）。そのなかで、国家の政策や諸制度に影響を与えようとする戦略的政治志向の社会運動は評価される一方で、そもそもそうした枠組みに関心を持たない予示的政治のような社会運動にたいする関心が低くなっているのではないか、というのがわたしの感じていることである。それでも、わたしとしては、非常に困難であるだろうが、非日常性の高まり、日常性の堰止めとしての〈68〉年の再到来は望みたい。小さな空間であっても、そこに、既存の権力構造や社会規範にたいする鋭い批判性をもった、あたらしい関係性や個人の生のありかたが、いまも編み出されているのではないだろうか。

■　プレ企画に参加して

最後に、大阪に戻るサンダーバードのなかでいろいろと思い巡らしたこと、大阪に帰ってから考えたことを書いて、終わりたい。

わたしは、1960 年代後半の学生運動、とくに東大闘争について研究をしてきた。研究をするなかで —— これは参加者への聞き取り調査に同走してくださった福岡安則先生が言われていたことでもあるのだが —— 当時の学園闘争について考えるならば〈その後〉が大事なのだと感じてきた。東大闘争に

ついて回想を始めると語りが止まらない、積極的に参加していなかったとしてもなんらかのこだわりを感じてしまう、そうした当事者たちがいた。そしてなにより、東大闘争をなんらかの参照点や基準点としながらその後の長い時間を歩んでいる参加者たちがいた。

本レジュメの内容に関わらせて言えば、東大闘争で全共闘派の学生たち（の一部）が模索していた予示的政治とは、自らが帯びる特権性や意図せずとも行使している権力を批判し、オルタナティブな望ましい関係性や集団のありかたを、自らがいま・この場で創出することを試みるものだった。東大闘争をくぐり抜け、予示的政治に影響を受けたならば、その後も、ときどきのいま・この場でどのように不正義や権力に対峙しているかを問わざるをえない。だからこそ、〈その後〉の歩み、生き方が問題になってくる。しかし、自らの生き方に一貫性を持たせながら、生活や労働のなかに見え隠れする権力や抑圧、不正義を批判し、さらに自らのありかたも変容させていくという、この課題に、誠実に取り組み続けることはどれほど困難だろう。こここそが、東大闘争を研究するなかでわたしが強く惹きつけられる部分であるし、同時に、自分だったらどうするだろう、自分はいま・この場でどのように生きているだろうかと、息が詰まるような重い問いかけを突きつけられていると感じる部分でもある。

生・労働・運動ネット富山代表の埴野謙二さんは、今回の企画にメールで声をかけてくださったときに、60 年代後半の大学闘争を学生としてではなく、教員として経験したと自己紹介をしてくれた。その「afterlives」として「私の現在そのものがある」とも書かれていた。それを読み、わたしは勝手にピンときたという感じがした。学園闘争で問われた自らのありようを問うということ、だからこそ〈その後〉が大事なのだということ、それを体現している人たちが富山にもいるのかもしれないと思 った。

実際に 1 月に富山を訪れ、第 1 部でわたしが話をさせていただいただけでなく、第 2 部では生・労働・運動ネット富山の事務所にお邪魔し、さらにみなさんとお話しする機会を持てた。富山大での埴野さんの講義、ネットの始まりは 70 年代以降埴野さんの講義に惹かれて集まった学生たちにあること、みなさんでやった養鶏場や生協、ラーメン屋、そのなかで各人がテーマを持っていろいろな運動や活動に出かけていること、そうした話を聞いた。それだけでなく、みなさんの食事をしながらの親密な会話、お互いの発言や間合いを尊重する耳のすましかた、そうしたものに接した。この時間をとおして、生・労働・運動ネット富山には、生活をともにしている者同士のような、平場の親密な関係性があること、そのなかで独特の言葉遣いと社会との切り結びかたが編み出され、共有されてきたこと、だけれどそこで閉じているのではなく、そこから外に出かけていく場であり、関係性なのだと思った。

予示的政治の継続には困難が伴う。その困難さを少しでも乗り越えるやりかたのひとつに、信頼できる仲間と小集団を —— 大きな組織は、いずれ組織維持のためにヒエラルキーや妥協的判断が必要になるので適さないだろう —— つくり、励まし合い、議論し合いながら暮らしていくことがあるというのは、東大闘争参加者のその後を見て感じたことだった。生・労働・運動ネット富山はまさにそうした小集団をつくって、予示的政治を実践してきた人たちなのではないか。わたしも企画に参加した国立歴史民俗博物館・「『1968 年』　無数の問いの噴出の時代」展（2017 年 10 月〜 12 月）の案内文にあった「この時代に噴出した「問い」はいまなお「現役」としての意味を持ち続けています」という言

葉を受けて、第 1 部で埴野さんが、「無数の問いを現役たらしめているのは、なになのか」と問いかけられていたことは、強く印象に残った。現役たらしめているのは、反戦や公害、大学の役割といった問いをつくりだしている社会構造であるとともに、問いを問いかけ続けている各地の人びとなのだろう。歴博の案内文について話した埴野さんの念頭にあったのは、自分たちの営みなのではないかと、あの日事務所でみなさんと話しながら考えていた。

富山に息づく〈68〉年の〈その後〉を見た。散会し、ひとり富山駅前のホテルの部屋に入ったときに感じていた興奮は、いまこれを書きながらも思い出せる。ネットのみなさんのこれまでの歩み、仲間たちとどのような生活と運動を営んできたのか、そうしたことはまだ十分に聞けていない。いつかまたゆっくりと、富山でいかに〈68〉年が生まれ、息づいてきたのか、そういう話を聞きに富山を訪れたいと考えている。

文献

安藤丈将, 2013, 『ニューレフト運動と市民社会 ―― 「六〇年代」の思想のゆくえ』世界思想社.

有末賢, 2012, 『生活史宣言 ―― ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会.

Breines, Wini, 1982, *Community and Organization in the New Left: 1962‐1968*, New York: Praeger Publishers.

Graeber, David, 2004, *Fragments of an Anarchist Anthropology*, Chicago: Prickly Paradigm Press.（＝ 2006, 高祖岩三郎訳『アナーキスト人類学のための断章』以文社.

Holloway, John, 2002, *Change the World without Taking Power: The Making of Revolution Today*, London: Pluto Press.（＝ 2009, 大窪一志・四茂野修訳『権力を取らずに世界を変える』同時代社.）

稲葉奈々子, 2010,「持たざる者の運動の〈予示的政治〉としての公共空間の占拠」『寄せ場』23: 13–29.

道場親信, 2015, 「戦後日本の社会運動」大津透ほか編『岩波講座　日本歴史　第 19 巻　近現代 5』岩波書店, 115–48.

大野光明, 2014,『沖縄闘争の時代 1960 ／ 70―― 分断を乗り越える思想と実践』人文書院.

Schieder , Chelsea Szendi, 2018,“Left Out: Writing Women Back into Japan’s 1968,” Tamara Chaplin and Jadwiga E. Pieper Mooney eds., *The Global Sixties: Convention, Contest and Counterculture*, London: Routledge, 140–58.

高畠通敏, 1977, 「大衆運動の多様化と変質」『年報政治学』（1977）: 323–59.

鶴見俊輔, 2005,「加害者と被害者」, 佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編『戦後史大事典 ――1945–2004　増補新版』三省堂, 106.

米騒動プレ企画　Part2
「〈68〉年から50年の〈後〉に一「故旧忘れ得べき」物語

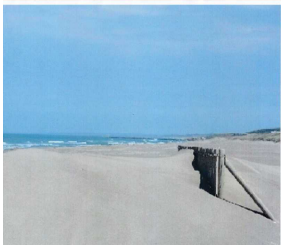
スクリプト（台本）

トーク

生・労働・運動ネット　富山

タイトル・文字・画像など	音・留意点など
0-1　タイトル　白画面 黒文字 **「米騒動 100 年―米騒動を抱きしめて」** **プレ企画**	ヘンデル作曲　サラバンド　ニ短調
0-2　黒画面　白文字 As time passes by memories of that day becomes clearer. My heart is bruised. Even my heart stops I can not forget it. I can not erase it.	
0-3　タイトル　白画面 黒文字 **〈68〉年から50年の〈後〉に** **――「故旧忘れ得べき」物語**	
0-4　中タイトル　白画面　黒文字 **1969年1月15日** **東大安田講堂時計台放送**	
0-5　黒画面　白文字 我々の闘いは勝利だった。 全国の学生、市民、労働者の皆さん。 我々の闘いは決して終わったのではなく、 我々に代わって戦う同志の諸君が、 再び、解放講堂から時計台放送を 真に再開するまで、一時この放送を中止します。	

0-6　　動画 	東大安田講堂の闘いの記録「嘆きの旅」 Yui Kuriyama
0-7　　ブルー画面　白文字 〈68〉年―それはなによりも生の解放だった みずからを拘禁・拘束していた全てから みずからを解き放つ喜びだった 〈68〉年―それは生の解放が進めば進むだけ この世界の変革に手をかけることが出来 るという喜びだった 〈68〉年―それはどんなに歴史の波間にみえなく なっても私たちを押す〈背後の未来〉で あり続けている 〈68〉年―「私・たちは遠くまで行くんだ」‼	カタロニア民謡「鳥の歌 El cant dels ocells 」アカペラ
1-1　タイトル　　白画面 黒文字 **「故旧忘れ得べき」** ―Should we forget old acquaintance?―	
1-2　　中タイトル　白画面 黒文字 **高見順：小説「故旧忘れ得べき」1936**	〈資料・1〉
1-3　　黒画面 音楽だけ	Auld Lang Syne 歌詞入り 高見順の「転向」後の 1936 年の長編小説―大正末期から昭和初期にかけてプロレタリア運動に邁進した学生たちの 10 年後の「虚無と退廃」に落ち込む姿を描く。
2　　タイトル　　セピア画面 白文字 **私のセンチメンタル・ジャーニー**	「流亡の曲」　映画「戦争と平和」1947 年東宝の主題歌

― Gonna make a Sentimental Journey to renew old memories ―	
2-1 安曇野　／　能登　／　内灘 有明美術館／坪野哲久文学記念館／内灘海岸 有明美術館 坪野哲久文学記念館 内灘海岸 安曇野・有明美術館 能登志賀町・坪野哲久文学記念館  内灘海岸	a.　安曇野・有明美術館→辻井喬「終わりからの旅」2005　〈資料・2-a〉 b.　能登志賀町・坪野哲久文学記念館→坪野哲久　〈資料・2-b〉 c.　内灘海岸→五木寛之「内灘夫人」(1969)　〈資料・2-c〉 3 つの写真を 1 枚ずつ順に
2-2　内灘闘争　動画 	2-2　内灘闘争 ＆ 砂川闘争 - 1953 ＆ 1956

内灘闘争

内灘砂丘に残っている試射場の跡

内灘闘争

内灘砂丘に残っている試射場の跡

2-3　　中タイトル　　セピア画面 黒文字

内灘愁歌

2-4　ローリング　セピア画面 黒文字

はるばると続く　アカシアの丘に
海鳴りの　海鳴りの　音　とうとうと響く
夏の日の思い出を　訪ねてひとり
白い砂丘をゆけば　光る日本海
友はどこに　歌はどこに
歳月(とき)はいま　流れて
燃える思い　熱い心
よみがえれ　この胸に
内灘の海よ

2-3　「内灘愁歌」(作詞五木寛之、作曲佐原一哉、歌森進一)〈資料・2-ｄ〉

3　タイトル　　白画面 黒文字 **1950 年代の「～の〈後〉に」**	3-1 グリーグ：「ふたつの悲しい旋律 Op34」「過ぎし春」 3-2 国際学連の歌
3-1　中タイトル　白画面 黒文字 **運動からの離脱は、** **歴史の創造への参加からの脱落であり、** **同時にみずからの夢を折ることであった。**	
白画面 黒文字 高橋和巳「憂鬱なる党派」(1965) 五木寛之「内灘夫人」(1969) 「デラシネの旗」(1969) 「変奏曲」(1972) 黒井千次「時間」(1970) 「五月巡歴」(1977) 「羽根と翼」(2000)	a. 高橋和巳「憂鬱なる党派」(1965)〈資料・3-a〉 b.五木寛之「内灘夫人」(1969)／「デラシネの旗」(1969)／「変奏曲」(1972)〈資料・3-b〉〈資料・3-b-1〉 c.黒井千次「時間」(1970)／「五月巡歴」(1977)／「羽根と翼」(2000)〈資料・3-c〉
4　タイトル　　黒画面 白文字 **・・・・〈68 年〉の後に・・・・**	4「伝説の全共闘の歌」
4-1　中タイトル **いくつもの「〈68〉年の後に」**	
「みんな夢でありました」 歌詞 **「帰り来ぬ青春」** 歌詞 **「泪橋」** 歌詞 **「光る夢」** 歌詞 **「時には昔の話を」** 歌詞 **「the flag」** 歌詞	4-1 森田童子「みんな夢でありました」(1975)〈資料・4-1-1〉 4-2 クミコ「帰り来ぬ青春」(1975)〈資料・4-1-2〉 4-3 茶木みやこ「泪橋」(1973)〈資料・4-1-3〉 4-4 山崎ハコ「光る夢」(1985)〈資料・4-1-4〉 4-5 加藤登紀子「時には昔の話を」(1986)〈資料・4-1-5〉 4-6 小田和正「the flag」(2000)〈資料・4-1-6〉

小池真理子 **「望みは何かと訊かれたら」1996** **「無伴奏」2007** **篠田節子** **「冬の光」2015** **桐野夏生** **「夜の谷を行く」2017**	4-9 パッフェルベル「カノン」 小池真理子「望みは何かと訊かれたら」（1996）〈資料・4-a〉 「無伴奏」(2007)〈資料・4-a'〉 篠田節子「冬の光」(2015)〈資料・4-b〉 桐野夏生「夜の谷を往く」(2017)〈資料・4-c〉
5　タイトル　　白画面 黒文字 **Looking for〈68〉**	5　グリーグ：「ふたつの悲しい旋律 Op34」「過ぎし春」
5-1　中タイトル **「近過去」？　「After Lives」？　「シニア左翼」** **アルケオロジー？　アフターライブズ？　シニア左翼？**	
5-2 ローリング 松田政男「増補新訂・風景の死滅」2013 ア 映画「三里塚に生きる」2014A クリスティン・ロス「68 年 5 月とその後」2014A 「東アジアから 1968 年を見つめなおす」：クリスティン・ロス「1968 年と権力の偶然性」（「ワセダアジアレビュー」No.17　2015）A オリヴイエ・アサイラス映画「冷たい水」（1994 年） 「5 月の後」（2012 年）公開 2015A NHK「新・映像の世紀」2015 ア 津村喬「戦略とスタイル増補改訂」2015 ア	5-1　バッハ「無伴奏チェロ組曲 1 番」 〈資料・5〉 「新・映像の世紀」 パリは燃えているか

「グローバルヒストリーとしての 1968 年」2015 ア 山本義隆「私の 1960 年代」2015A 島田雅彦「優しいサヨクの復活」2015 シ 津村喬「横議横行論」2016　ア 堂場瞬一「メビウス 1974」2016A 映画「無伴奏」2016A ローラン・ジョフラン「68 年 5 月」2015 ア 西堂行人「証言日本のアングラ」2015 ア 小林哲夫「シニア左翼とは何か」2016 シ 陣野俊文「テロルの伝説」2016 ア アナザーストーリー「東大安田講堂事件～学生たち：47 年目の告白」2016 ア 小嵐九八郎「彼方への忘れもの」2016 ア 絓 秀実「タイムスリップの断崖で」2016A 高口 英茂 「東大全共闘と社会主義 第 5 巻」2016	〈資料・5-a〉
6　タイトル　　白画面 黒文字 2017 **年** ―**「あぁ〈68〉年から** 49 **年」の〈後〉に**	
中タイトル　　白画面 赤文字 **歴史的遺物？　レクイエム？　見果てぬ夢？**	
6-1　　文字固定 ・堀内孝雄「聖橋の夕陽」ラジオ深夜便 1 月 ・「高橋和己　世界とたたかった文学」2 月 ・桐野夏生「夜の谷を行く」3 月 ・大道寺将司　獄死　5 月 ・大坂正明容疑者　逮捕 6 月 ・「10・8 山崎博昭プロジェクト－ 50 年を経て 今、世代を超えて語り合おう」7 月→ ・栗原康編「日本のテロ」8 月 ・BS　CH12「1972 年学生運動と青春ソング」9	堀内孝雄『聖橋の夕陽』 cover by キー坊 〈資料・6〉 〈資料・6-a〉 〈資料・6-b〉 〈資料・6-c〉

月	
6-2　　固定 ・ダッカ事件 40 年　9 月 ・映画「三里塚のイカロス」9 月公開（2014「三里塚に生きる」続編 ・国立歴史民俗博物館「1968 年展」10 月 ・「山崎博昭君 50 周忌、羽田弁天橋と福泉寺で追悼」10 月 「かって 10・8 羽田願争があった　山崎博昭追悼 50 周年記念」10 月 ・映画「エルネスト　もう一人のゲバラ」10 月公開 ・上野千鶴子＋雨宮処凛「世代の痛み」10 月	山崎ハコ「風に乗って昭和」 〈資料・6-d〉 〈資料・6-e〉 〈資料・6-f〉 〈資料・6-g〉
固定 ・雑誌「情況」－「10・8 羽田闘争から 50 年」＋「反日武装戦線とは何だったのか」10 月 ・「週刊朝日」2017・11・10　グラビア「大学紛争、ベトナム反戦運動、三里塚闘争「1968 年」が投げかけたもの ・塩見孝也　死去　11 月 ・松岡利康／垣沼真一「遙かなる 1970 年代-京都学生運動解体期の物語と記憶」（鹿砦社）11 月	「「
6-3 こゝから 行くべき その道は どこかと できるなら もう一度 捜さないか 戦える 僕らの武器は 今 何かと それを見つけて こゝへ 並ばないか 僕は 諦めない 誰か 聞いて いるか 僕は こゝにいる 誰か そばに いるか やがていつの日か この国のすべてを 僕らが この手で 変えてゆくんだったよね	音なし 〈資料・6'〉

7　タイトル　　赤画面 白文字 **終わりに**― **「〈68〉年から 50 年の〈後〉へ」**	「夕陽に向かって走れ」
中タイトル **陽落ちて なお 暮るるにはやし** **―「背後の未来に促されて」**―	
7-1　　中タイトル **〈仮装〉「高齢者生存組合全国評議会からの招請状」**	「高齢者生存組合全国評議会」からの招請状を〈仮装〉する〈資料・7〉
7-2　　黒画面　白文字 かって 60 年の、〈68〉年の戦場を、熱い身体で駆け抜けようとした諸君！ 今も傷は痛むか、今も傷は癒えぬか 身を立て、名をあげ、なお傷は疼くか 功も成さず、業も績まず地を這いながら、なお傷は膿むか 世に君臨し、世に背をむけ、なお傷は深まるか かって 60 年の、〈68〉年の戦場を、熱い身体で駆け抜けようとした諸君！ 曰く「2025 年問題」、 曰く「超少子高齢化社会」、 曰く「一億総活躍社会」 曰く「我が事・丸ごと共生社会」・・・ 我・らは 対象＝ OBJECT であるか、手を差し伸べられ、介護され、支援される対象＝ OBJECT であるか 我・らは OBJECT する＝反逆する者ではないのか、一つの直接性としてある者ではないのか、在ることが世界の果てにいたるまでの反逆である者では	

ないのか 「全世界を獲得するために！」――それは幻の旗であるか 「孤立を恐れず連帯を求める」――それは幻の旗であるか	
かって 60 年の、〈68〉年の戦場を、熱い身体で駆け抜けようとした諸君の内、長い雌伏の時の後に、「3・11 ／ 12」の衝撃に身体を起こし、反原発の闘いに加わり、更には 2015 年夏をピークとする「安保法制反対運動」に参集した諸君！ その行動で傷は癒えたか？ 諸君の雌伏の間に累積されてきた原発稼働システムの全列島化に対して、北東アジアへ向けての「安保」装置の実体化に対して、その行動はとどいていたか？ なによりも、その行動は、「〈68〉年からの〈後〉」の時のなかで、諸君の身を立て、名をあげることで果たしてきたこの列島社会を分断する罪多い営みに対する、どのような真摯な反省の上に成り立っていたのか？ その諸君の営みのうえにこそこの列島を宰領し、差配する者たちの悪行は累積されてきたのではないか？―そのことに対するいかなる自己再審のうえに諸君の行動は成り立っていたのか？ さらには、累積されつつある諸君の生の「包摂」・「捕獲」システムに、諸君は〈声〉をあげてきたのか？ なによりもこの世界の内なるわが身体の根底的な自己解体をこそ、諸君はめざしていたのではなかったのか？ 諸君の身体は「OLDS」などと、あるいは「シニア左翼」などと呼称されることに耐えられるのか？	「負け犬たちのレクイム」
かって 60 年の、〈68〉年の戦場を、熱い身体で駆	「夕陽に向かって走れ」

け抜けようとした諸君！
おお 時は巡ってきた
おお 反逆の再開の時は巡ってきた
かって 58 年前にも、50 年前にも、成し遂げえなかったことを果たす時がきた
国家意思を捏造し続ける石造物の内へ突入し、国家意思を僭称する者どもを駆逐する時がきた――「ミンナ出テイケ、独リモ残ルナ」と詰め寄る時がきた

おお 時は巡ってきた
おお 反逆の再開の時は巡ってきた
かって 58 年前に、50 年前に「阻止」・「粉砕」出来なかった負の果てたる今日ただ今の列島の『宰領』・『差配』者に、突きつけ、宣言する時がきた――「君ラハ高齢者ニ関ワル全テノ制度・政策カラ手ヲヒキ、我ラノ生の自治ヲ認メヨ、我ラハ君カラノ自律を宣言スル」と責め寄る時がきた

全ての生を無条件に肯定せよ！
一つ 我ら高齢者の生存にかかわるすべての費用を無料とせよ
一つ そのための財源を「防衛費０」「二乗の累進課税」「二乗の法人税」で調達せよ
一つ 障害者生存組合全国評議会・高齢者生存組合全国評議会との協議の下、「社会総合サービス法」を制定せよ

赤画面　白文字
戦友諸君、老いたる兄弟姉妹諸君！
これまでに獲得してきたすべてを〈武器〉にかえ、わが身を包摂する生の捕獲システムと闘え、この闘いを個別闘争などと間違えるな、この闘いはこの列島社会をくつがえす根底的な闘争なのだ。あぶくのような「立憲」やら「議会制民主主義」やらの根どころを創りかえる闘いなのだ。

高齢者生存組合全国評議会とともに一斉蜂起せよ！	
7-3　　黒画面　白文字 玄冬の季節に この社会の〈亀裂〉に落ちた人びとをおもい、列島のどこへでもかけつけたいのに、 私は、台所の洗い場の 1 ～ 2 mを歩くことができない あぁ、私の身体よ、私をして〈68〉年から 50 年の〈後〉にも〈問う〉者たらしめ続けよ この社会の全ての生の無条件の肯定を求めて、列島をかけめぐりたいのに、 私は、トイレへの 2 ～ 3m を歩くことができない あぁ、私の身体よ、私をして〈68〉年から 50 年の〈後〉にも、なお〈ひとつの直接性〉たらしめ続けよ	欅坂４６「不協和音」
2018年1月13日 **生・労働・運動ネット　富山**	2018 年 1 月 13 日 生・労働・運動ネット 富山

※　埴野謙二は、このスクリプトをもとに作成された DVD を上映しながら、途中の で、「『〈68〉年から 50 年の〈後〉に』―故旧忘れ得べき」物語を語った。

過去は死なない、過ぎ去ってもいない
－２０１７年冬～２０１８年春

埴野謙二

1.「津軽海峡・冬景色」

大雪が予報されている師走の末の午前１０時
這うようにパソコンにたどりつく

いつまでたってもブラックボックスのままのパソコン
ぎこちなくぎこちなくキイをたたく

でも　ここまでくれば　「連想の魔」
連想は連想を呼び　「津軽海峡・冬景色」にたどりつく

あれは、〈６８〉年から続く抗いの極私的「終焉」の年
１９７７年
冬の津軽海峡ならぬ　初春の北陸富山駅
「誰も無口」

「さようなら、最後の君・たち　帰るでもなく、行くでもなく、
去っていく君・たち　さようなら
折あって冬のこの街を通り過ぎるとき、君・たちは
あの『古戦場』に　ひとつの〈埋木〉をみるだろう」

連想の指は、次々に歳月をたどっていく

大雪が予報されている師走末　もう数日もすれば
〈６８〉年から５０年になる日の午前１２時

（年末恒例の「紅白歌合戦」の最後は「津軽海峡・冬景色」だった。）

2.「もちこたえようぜ」

雪の切れ目の正月はじめ
年明けを挟んで数日の間に
家のあちこちに不具合が起きる

敗戦から２年に建てられて７０年
住みなして４５年
途中で補強をしたとはいえ
何処が壊れても不思議ではない

何処が壊れても不思議でないのは
その住人もまたおなじ
見果てぬ夢を追いかけ
遂に稔らぬ夢をかかえ
もう這うようにしか動けない

何処が壊れても不思議でない
家と住人

この冬は雪が多いという
正月の二日

「おーい　もちこたえようぜ」

3.「パートナー」

年末ぎりぎりに注文品が届いたという
いろいろ考えた自己流健康法
それに必要な最低限度の注文品
「福袋」の予告がついていた
と　パートナーが言う

「福袋」って買ったことがないの
何が入っているのかな
欲しいのなら買ってみたら
えっ　買っていいの？　いいの？
楽しみだなあ

裏目を張り続けて５０年
その３０年を支えてくれた亡き妻
その後の２０年を支えてくれたパートナー

楽しみだなあ　何が入ってるのかな

負け戦をやめるのはむずかしいのさ
裏目を張り続けるしかないんだよ

新年まであと１時間　大晦日の午後１１時

4.「年賀状」

ほんの数枚の年賀状
それでも「生きてるよ」と伝えたい
秋のセンチメンタルジャーニーの写真を使おう
「Gonna make a Sentimental Journey, to renew old memories.」

「すごく贅沢な条件がついてるんだから・・・」
パートナーに背中を押されて押されて

遠い記憶をよみがえらせる風景プラス近くの街の古本屋
それが条件

秋のセンチメンタルジャーニー

米軍試射場の残骸があるあの砂丘の風景

葉書の片隅にそっとくわえよう

「友はどこ　歌はどこに　歳月はいま流れて　燃える思い熱い
心よみがえれこの胸に　内灘の海よ」（内灘愁歌」から）

センチメンタルジャーニーも年賀状も
来年はありやなしや・・・・・

5.「時限爆弾」

沖縄の陸自建設現場で不発弾処理
2017 年 12 月 25 日 03 時 00 分
鳥取の解体中民家から不発弾
2017 年 12 月 29 日 14 時 09 分

時限爆弾を
仕掛けておいたのさ
２０１８年の１月１８日と１９日とが入れ替わる深夜に爆発するように

不発だった？
５０年の風月に腐食されて
不発だった？

だが未発なんだ
５０年前の〈問い〉は
だが未発なんだ
私という直接性が投げた〈問い〉は

不発がなんだ！　５０年の風月がなんだ！
未発を抱えて　もう５０年
それがなんだ？　それがなんだ？

6.「松前漬」

「松前漬」をつくる
おぼつかない手つきで「松前漬」をつくる

おぼろに残る亡き妻の手つきを
思い出し思い出ししながら
「松前漬」をつくる

（「松前漬」というネーミングにはひっかかる）

逝く１年前の正月明けにも
つくっていた

「我が家では性別役割分担してでね
私の担当は外　もう１５年くらいになるかな
でも台所の手作業って　気分が変わって
嫌いじゃない」

まるでわざとのように
閏年の２月２９日に逝った

「とうとう今年はつくれなかったね　松前漬」
病院の窓から　市街地が　雪で書割のように見えた
１９９６年の１月の末

6 回目の〈2 月 29 日〉は 2020 年　　まだ 2 年先
来年も再来年もつくってみるよ　　「松前漬」

7.「『われらがわれに』かえっても」

「われらがわれに」かえっても
われにかえらないわれ・らもあるさ
５０年前も　今も
われはわれ・らのままさ

〈明日あると信じて来たる屋上に旗となるまで立ちつくすべし〉（道浦母都子）
立ったままだよ　５０年
どす黒い旗だよ　この風月にさらされて
「あれは幻の旗だったのか」
そうではないよ　うつつの旗だよ

黒い旗だよ　われ・らが旗だよ

５０年前も　今も
立つたままだよ
どす黒くぼろぼろでも
われ・らが旗だよ

われはわれ・らのままさ

8.「ざわざわ」

「寒中見舞い」ありがとう

八十路に入って２年

家のなかでは　杖でよたよた
外出は車椅子
でも　血管のなかは　ざわざわ

今年は　〈６８〉年から５０年
そして　「米騒動」から１００年

血管ののなかは　ざわざわ　ざわざわ
ざわざわ　ざわざわ

血の氾濫　　ざわざわ　血の叛乱　ざわざわ

9.「喪雪」

雪が黒く見えたことがあったよ

１９７２年２月１９日
テレビの中で降っていた雪が黒く見えた
一日中くぎずけになっていたＴＶのなかで
黒い雪が降っていた

２月１９日　私の誕生日　３０半ばの誕生日
その日から数年　２月に降る雪が黒く見えることが
何度かあったよ

「喪雪」とでも言うしかない黒い雪
「喪雪」にいたる　「喪雪」から始まる　彼・らの道行

「終わりじゃない」「終わりじゃない」
何度つぶやいても　雪は黒かった

八十路に入って２年
また「喪雪」の季節がやってくる
「背後の未来」におされて
「終わりじゃない」「終わりじゃない」
と　つぶやき続ける

10.「図書館通い」

「図書館通い」をひいたら
人生には　ほとんどなにも残らないな

とりわけ〈６８〉年からは
大學へ行ったって　何もするまいとしてたから
図書館へ行くだけだったよ

まだ経済学部と同居していた貧しい図書館

収蔵されてから誰にも手にとられたことのない書物のつぶやき
かって一世を風靡した書物の疲れた哄笑
時代から置いてきぼり喰った書物のすすり泣き

うす暗い書庫をさまよいながら
そんな本との出会いがどんなに貴重なものだったことか

〈嵐〉の季節が過ぎて
みるみる大学の「更新」の亢進がすすみ
図書館も例外ではなかった
整えられた書庫の中をどんなに歩いても
もう何も聞こえなかった
私の耳もおかしくなりかけていた？

今は毎週１回　県立図書館通い
次の１週間の「食べ物」を借り出して
今は雪に覆われれた図書館の駐車場で
パートナーと昼食

やがて雪がとけて緑に包まれる
その緑の根元への散骨
それが「図書館通い」の行きつくところ

11.「その日付け」

ちがうんだ　「忘れられない日付け」といっても
プライベートなものでも
「歴史」の年表にのこるようなものでもないんだ

何かの「記録」には残るだろうが
かかわりがあった者にも忘れられていて
私には忘れられない日付け
そんな日付けってないかな
１９６９年４月９日というのはそんな日付け
その日から私は二重言語を生きることになった

え、なんなんだ　その日付けは？ってか
もったいぶっているんじゃないよ
「富山大學　機動隊導入」の日だよ
１９６９年のことだ

その後の１０年
欠語と失語　そして　吃語が　私の言語

「１０年は長い月日か　１０年は短い日々か」

「往時茫々」なんて嘘さ
絶対に忘れられない　忘れてはならないことって
あるだろ
５０年たっても　そうなのさ

刊行物案内

生・労働・運動ネット　富山

ＺＩＮＥ・２　2014・秋
　〈フクシマへ〉折り返すことにむけて
ＺＩＮＥ・３　2015・春
　さよなら　私の死者・たち――「困民丸」の小さな歩みから
ＺＩＮＥ・４　2015・夏
　「敗戦 / 戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か
　　――「ラウンドテーブル・2014」での論議から
ＺＩＮＥ・５　2015・秋
　アンラーニング・2015　問いをもちよる
　　――施設で考えた中途半端な支援と労働
ＺＩＮＥ・７　2016・夏
　私・たちの来歴
ＺＩＮＥ・８　2016・夏
　「階級」という問題の来歴：資料リスト　00 年代から現在
ＺＩＮＥ・９　2016・夏
　我田引用「ヤサグレたちの街頭」考
ＺＩＮＥ・10　2016・秋
　NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR ！
　　アンダークラスは〈横謀〉する
　ON THE STREET ／ IN THE NIGHT @ TOYAMA
ＺＩＮＥ・12　2017 年・冬
　復刊　2008 年パンフレット
　「米騒動 90 年」:「米騒動」から何を受け取るのか
ＺＩＮＥ・13
　復刊　2009 年発行ニューズレター
　〈背後〉の未来が現在と出会うとき――浦島太郎物語
ＺＩＮＥ・14　2016・秋
　「熊谷６人殺害事件」のためのノート

生・労働・運動ネット富山

2018・春

代表　埴野　謙二

〒930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers.net.tym@gmail.com